

巻頭言

いのち 人間性回復と生命のつながり

—里山資本主義と協同労働を地域でつなぐ—

岡村 信秀(広島県生活協同組合連合会 会長理事)

私たちをとりまく環境は、グローバル経済を背景に、規制緩和と競争激化が進行し、地域経済の疲弊とコミュニティの空洞化が常態化してきた。また効率と画一性を価値とする現代社会は、人間関係の希薄化や引きこもりの急増などの社会問題を発生させ、「無縁社会」といわれる「ばらけた社会」を出現させた。

そのような中、これまでの価値観に疑問を持ちはじめた人々が、自分たちが住んでいる地域の中で自分らしく生きていきたいと願い、当事者主体による仕事起こしや地域づくりに向かいつつある。そこで大切にされている考え方は、経済効率や選別主義に偏った価値観ではなく、一人ひとりの成長と多様性を大切にするという人間性回復の価値観である。これらの取り組みはワークスコープをはじめ様々な協同組織が主体となっているが、ばらけた社会の克服への道として行政や地域社会から高い評価を得ている。彼らは今まさに閉そく感漂う現代社会に風穴を開け、新しい時代を切り拓こうとしている。

このような人間性回復の取り組みは都市・農村部を問わず全国各地に広がりつつ

あるが、近年“経済100年の常識”を疑い、マネー資本主義の対極を志す「里山資本主義」の実践が注目されている。今から30年前に広島県総領町ではじまった“過疎を逆手にとる会”(現“逆手塾”、人口1,510人高齢化率40.6%)は先駆的である。30年前の1980年代の日本社会といえば、規制緩和と民営化が強力に推進され、戦後の枠組みが大きく変わる「構造転換期」であった。この時期は、農産物自由化をはじめとする一層の市場開放が求められ、国内生産は1984年をピークに縮小過程をたどることとなった。同時に、丸太輸入自由化後の林業の低迷は、中山間地域の基礎産業である農林業の基盤を弱体化させ、中山間地域は衰退し過疎への道に拍車がかかった。その結果、中山間地域では生命をつなぐという根源的な能力を失いはじめたのである。

里山資本主義の先駆的実践はこのような構造転換期にはじまったわけであるが、この間逆手塾は地域資源を最大限活かし、里山の管理、住民の居場所づくり、エコストーブの開発・普及、高齢者へのサービス提供、障害者の社会参加、高齢者がつくった野菜の有効活用など地域住民の多様なニーズに

応えてきた。最も条件不利な過疎を逆手にとった逆手塾のこれまでの実績と成果は、地元住民をはじめ多くの人々に元気と希望を与え、現在全国に広がっている。このように里山資本主義の実践は長い年月と労力を積み重ねてきたわけであるが、中山間地域が失いつつある生命のつながりを再生させる原動力となりつつある。

生命のつながりは自然と人間の共生が大前提となるが、改めて“農”の観点から整理してみる。森の中での活動や農業体験は子どもの成長を促し、生命のつながりを体で学習するといわれている。農業は、「土を耕し、種をまき、いのちを育み、いのちをつなぐ」という人間にとって最も基本的な活動であり、半世紀前までは都市部を除き、全国各地で当然のこととして行われてきた営みであり、多くの子どもたちはその日常的な風景の中から様々なことを学んできた(喜多方市)。2007年からはじまった福島県

喜多方市小学校の農業科導入はまさに生命のつながりを実体験する試みであり、内外からの期待も大きい。

これまで述べてきたように第一次産業である農林業を取り巻く環境は危機的な状況にあるが、特に担い手不足と高齢化は深刻である。そのような中、ワーカーズは担い手を軸に協同労働による参入を決めたが、その意義は大であり、中山間地域の再生への第一歩となることを願っている。このように時代は、今大きく変わろうとしている。グローバル経済を背景とした市場原理主義の暴走は制御不能であるが、地方からの人間性回復と生命のつながりの再生は可能である。里山資本主義とワーカーズの挑戦と運動の広がりはまさに地殻変動を感じさせる。今後は、里山資本主義と協同労働運動が地域の中で多様につながり相乗効果を発揮することが期待される。